

フェスタ・ジュニーナの振り返り

[Shin](#) [てじてじ](#) [みちこ](#) [りか](#) [早希](#) [トム](#)

Shin

フェスタ・ジュニーナの振り返り

Shin

今回の活動を一言で振り返ると、「ほろ苦さ」となります。決してマイナスというわけではありません。こうした経験があって、さらに活動が一步前進するのでしょうか。では、以下、振り返ります。

まずは、振り返りのはじめに、ぱずるの皆さん、とりわけフェスタ・ジュニーナ参加のために、人一倍、汗をかいてくれた美智子さん、さやかさんに「ありがとう」と伝えたいです。

最初に取り上げたいことばは「判断」です。今回のフェスタ・ジュニーナでは、2つ判断ミスをお犯してしまいました。一つは参加者に関する判断ミスであり、もう一つはタイムマネジメントに関する判断ミスです。参加者に関する判断ミスというのは、あまりにも多種多様な学生たちを招き過ぎたという点です。ぱずるメンバーだけではなく、月曜日4限の学生、松尾の非常勤先の法政大学の学生、さらには、同じく法政大学の日本語教育関係のゼミ生グループと4つの団体が参加したので、大きな混乱を招いてしまいました。活動をぱずる以外に広げていくことは、やはり大切なことだと思いますが、適正規模があったと反省しています。タイムマネジメントに関する判断ミスは、帰りの時間に関する判断ミスです。日帰りの参加者はそれぞれ自身が乗る電車の時間を決めていたにもかかわらず、どうしても最後のダンスを踊ってもらいたく、松尾が引っ張ってしまいました。この点、結果的に皆さんにご迷惑を掛けてしまいました。早速、太田の皆さんのMLにおいて、来年は、夕方の早い時間に一度、フェスタ・ジュニーナのメインのダンスを踊らせてもらえないかというお願いをしておきました。この点も来年以降に向けた課題したいと思います。

次に取り上げることばは「交流」です。普段、なかなか保護者の方とお話する機会は持てません。しかし、今回は少し保護者の方とお話することができました。特に、最近、教室に姿を見せずブラジルに帰ってしまったのだろうかと思っていたJaquelineさんのご両親とお話できたことが大きかったです。ポルトガル語教室に来ていない理由は、塾に通っているからとか。中学2年生になり高校受験を目指してのことなのでしょう。Jaquelineさんが教室に来ないのは寂しいですが、日本に定住する可能性もあるのですから、しっかりと学んでもらって希望する進路に向かって欲しいと思います。これに関連して、Jaquelineさんが海の日企画に参加してくれることになり、東女での一日学生体験を通して、是非とも将来への夢を持つ、一つの機会にしてほしいです。

次のことばは「共生」です。実は、月4の授業で振り返りを行ったところ、多くの学生から会場に日本人の姿がほとんど見られなかったとの指摘を受けました。実は、この点、自分は全然感じなかったのです。自分の感覚が麻痺しているのかあと思いつつ、これまでのことを振り返ったりもしました。私はあの会場、そしてあの活動は、太田や近隣に在住しているブラジル人にとって自分たちが100%ブラジル人であっていい日、すべてが受け入れられる居場所であったのではないかと思うのです。あの場所では日本語ができるとかできないとかまったく関係なく、ブラジル人としていられます。もし、あの場所に多くの日本人を招くとしたら、それはそれでよい交流にはなるかもしれませんが、ブラジル人として100%楽しむことができるのかなあと思えます。じゃあ、ばずるがフェスタ・ジュニーナに参加するのはどうしてなのか、となるかもしれません。ばずるは、毎月、ブラジル人コミュニティで活動しているわけですから、単なるお客さんではありません。だからこそ、テントも準備していただけますし、ダンスを披露する機会もいただいているのではないかと思います。そこにむしろブラジル人の懐の深さを感じました。一昨年は、太田市にあるカトリック教会でフェスタ・ジュニーナが開催され、参加したわけですが、そのときはもっと日本人の参加者が多かったです。それは、教会の関係者として、日本人が一定数存在していたのが一因ではないでしょうか。今回は、ブラジル人学校で開催したわけですから運営側に日本人の関与がなかったのだと思います。

次のことばは「難しさ」です。今回の活動では、14時から1時間弱、母語保持教室を行ったわけですが、東京からの参加者は子どもたちの学びに関わったり、寄り添ったりすることができませんでした。勉強が始まっても仲間同士でしゃべっている参加者がいました。また、ほどなく東京からの参加者は2階でダンスの練習を始め、子どもたちとの直接的な交流がほとんどありませんでした。「ちょっと今日はどうなんだろう・・・」と思っていましたが、日曜日の振り返りのとき Hiromi さんは「子どもたちの様子が明らかにおかしかった。子どもはちょっとした雰囲気のおかしさにも敏感だから」というようなことを言っていました。この点もやはり、参加者が多様で、教室に関し、事前に十分に伝えることができなかったのだと思います。今後、忘れてはならない点だと思います。

最後のことばは「継続」です。色々な課題も見えたわけですが、何よりフェスタ・ジュニーナへの参加が3年間継続されたということが何よりの成果ではないかと思います。何でもないので思えますが、まずは、ブラジル人コミュニティでフェスタ・ジュニーナが実施されなければ参加できません。昨年度は、大震災の影響で太田のカトリック教会のフェスタ・ジュニーナが中止になったのですが、ピタゴラス校で開催されたので参加することができました。今年度も引き続きお声掛けいただいたことを感謝するとともに、ばずるは新たに一年生のメンバーを迎えることができたので、ああいう形で参加することができました。当たり前ではないことが当たり前のように感じられることを感謝しつつ、当たり前のことを当たり前のこととして継続していくことの難しさ意識したいものです。そして、今後も活動を継続していきたいし、関わっていきたいと思っています。

ぶっちゃけ、ばずる活動をやっていなかったら、もっと寝る時間も持てるし、週末ものんびり寝られるんだろうなあと思います。それでも一緒に活動してくれる仲間（学生）がいるうちは、続けます。それはボランティア精神とか自己犠牲とかじゃなく、何よりも自分が夢中になれるこ

とだからです。学生が少しずつ成長していく姿、活動の中で見せる笑顔、時に見せる苦悩の顔(笑)を見ること、子どもたちや太田の皆さんとの触れ合い、太田に行くたびに「ただいま」って思える感覚、すべてがこの活動をしているからこそ得られるものです。そして、活動を通し、私自身、ほんの少しずつではあるけど、進化している実感があります。「ほろ苦さ」も進化の証だよね。まだまだ成長しなきゃ。楽しむことで学びは広がるのだから。

てじてじ

2012年6月30日(土) Festa Junina 振り返り

6月30日から7月1日の朝まで、2日間に渡り太田で過ごしました。主な出来事を母語保持教室、Festa Junina、ホームステイの3つに分けて振り返りたいと思います。約1ヶ月後の振り返りとなってしまったため、全体としては記憶が薄れていることを否認ませんが、だからこそ残っている部分が濃く浮き彫りになっているような気がします。(言い訳です…)

今回の太田訪問は、Vamos Papear という母語保持教室の在り方、また私自身やばずるの関わりを改めて考えるきっかけとなりました。この日、東京からの参加者がとても多く、それによって子どもたちの学習環境は大きく変わりました。東京からの参加者の多くは、母語保持教室よりもブラジルのお祭りに参加するという気持ちが大きかったかもしれません。また、初めて教室を訪れた人も多かったので、教室でどのように過ごせばいいかわからず、結局、いつもの仲間とおしゃべりをしてしまったという人もいたのかもしれませんが。とにかく、全体の雰囲気としては、子どもたちや教室活動のことは二の次になっていたように思えます。私も少し戸惑っていたくらいですから、子どもたちの目には、きっと異様に映ったことでしょう。私は、2階でのダンス練習をサボりたいがために(笑)、3階に残って小学校低学年のJulia、Hisae(ナターリア)と一緒にいました。主にアルファベットの筆記体を書く練習をしているHisaeちゃんの横に座って見ていたのですが、上手に書けたときに褒めたり、集中力が切れ気味のときに励ますくらいのことしかできませんでした。それでもこの日、私がMisakiちゃんの横にいた意味は何かしらあったと思いたい!けど、実際はどうなんだろう。。。やはり母語保持教室において「ポルトガル語ができない」という根本的な問題は、常についてまわります。これまで、ばずるでも様々な企画があがり、子どもたちと共に活動をしてきましたが、やはり基本は毎週の教室活動にあること、また、それはポルトガル語を通じて広がっていく学習活動であること、そして、日本語はそのポルトガル語学習を支える一つとして役割を担ってはいるけれど教室のメインではない、それらを改めて思いました。

Festa Juninaへの参加は今回が三度目となりました。三度目、、、。なんだか自分がすごく歳を取った感じがします。一昨年や昨年の私は、とにかく好奇心の塊で、小さいことの一つ一つに反応していました。会場を探検するかのように見て回り、そこにいる人とコミュニケーションを試み、色々な物を食べ、全身全霊で満喫するエネルギーがあったのですが、今年は、なんだかご隠居さんのような気分でした。もちろん、実際に歳も取り、体力が無くなってきていることもあるかもしれませんが、心も落ち着いてしまった感じがします。太田訪問も数を重ね、毎回新たな驚きの

ような刺激は無くなってきました。しかし、そんな時に初めて **Festa Junina** や **Vamos Papear** に参加した人から感想を聞くと、ハッとします。自分も同じような感想を持っていたことを思い出すのです。数を重ねることにより、新鮮味は薄れていきます。でも、数を重ねたからこそ見えてくるものもあるし、アイデアも生まれてきます。そして、新たな仲間からは、常に追体験も得ています。色々な視点を得られるのは、この活動が年月を経たからだと思います。そのときどきに視点を切り替えながら更に活動を続けていきたいです。「ご隠居さん」などと書きましたが、そもそも太田のこと、そこでのブラジル人社会のこと、私はほんの入り口に立っているだけで、まだまだ沢山のことが待っているはずです。**Festa Junina** を三回経験しただけで、ご隠居さんモードになるなんておかしいですよ。来年は、自分に何ができるか、もっと積極的に模索していきたいと思います。

ホームステイでは、**Marly** さん、**Milena** 親子のお宅に泊まらせていただきました。**Milena** とバービー人形やリカちゃん人形でたくさん遊びました。**Vamos Papear** で見る **Milena** は、どんどん成長して大人っぽくなっています。でも、家での **Milena** は、お人形さん遊びをする小学校6年生の女の子でした。お気に入りのバービー人形を紹介してくれたり、キッザニアに行った話をしてくれたり、、とにかく色々な話をしてくれました。**Milena** は、小さいことにでもよく「ありがとう」と言います。**Vamos Papear** では聡明な子という印象でしたが、色々話して、心のやさしい子であることがよくわかりました。**Festa Junina** では、「ご隠居さん」でしたが、**Marly** さんのお宅では、「初めて」がいっぱいでした。ブラジルのテレビ番組を見たのも初めて、**Barra Bemto** (ドラマ) の映像を見たのも初めて、キビやコッシーニャなどのブラジル料理をいただいたのも初めてでした。そんな初体験をして、**Festa Junina** では単に自分が何も見ようとしていなかっただけなのかもしれないと思いました。**Marly** さんのお宅で過ごした時間は、私にとって大切な宝物です。彼らに会いたい、何かしたい、一緒に過ごしたいという思い、これこそが私が太田に行く大きな理由なのだとはっきり感じました。

みちこ

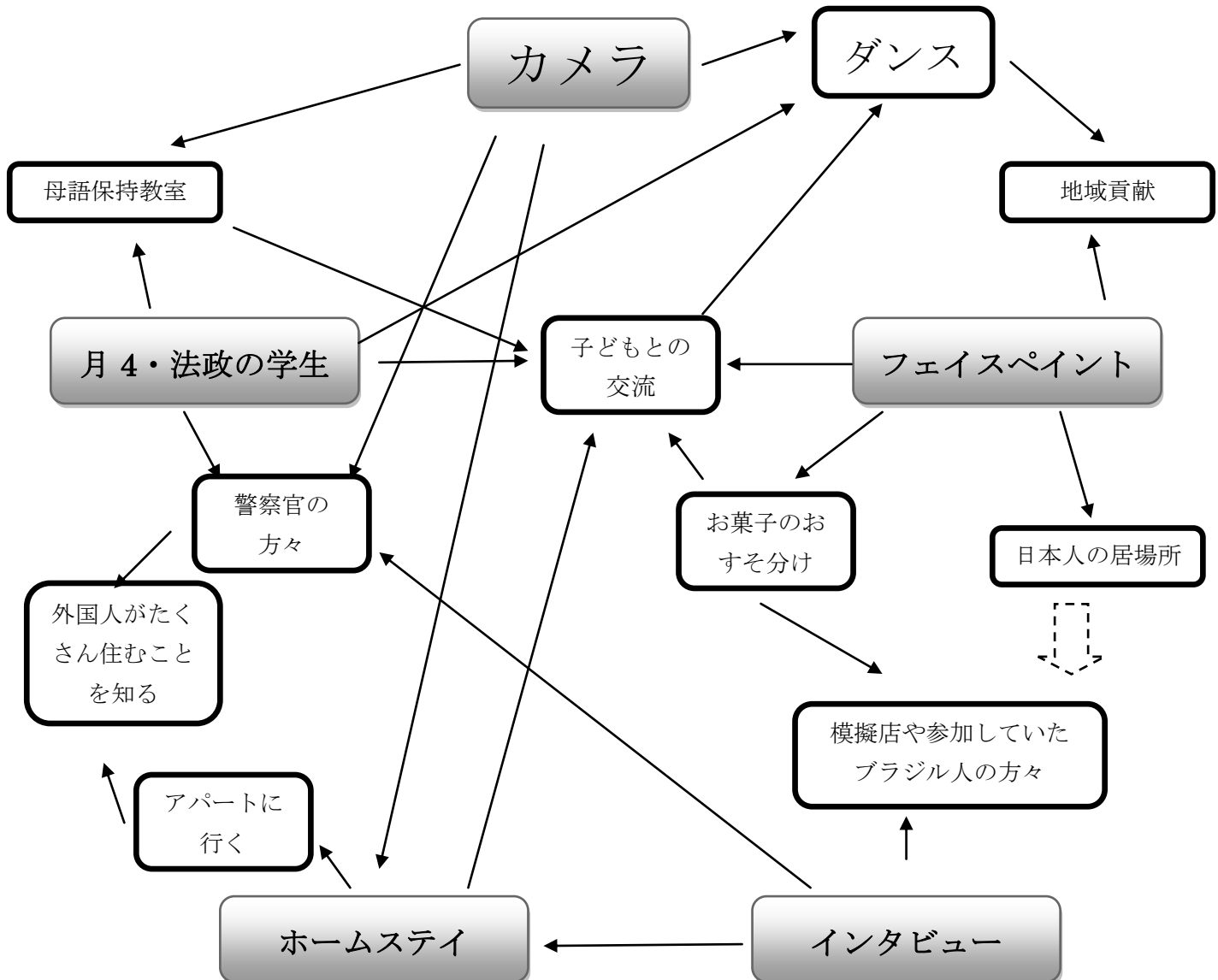
2012.6.30 フェスタジュニーナ振り返り

杉山美智子

月曜日 4限の言語と社会の諸相で考えた振り返りに加える形で、ばずる視点の振り返りをしたいと思います。まず、月曜4限では、今回以下の5つの視点から振り返りを行いました。

1. カメラ
2. インタビュー
3. 月4・法政の学生
4. フェイスペイント
5. ホームステイ

以下の図は、自分の頭の中で自分の活動がどのようにつながったかの図です。



月4学生としての振り返りは先生のホームページにアップしてありますので、ばずる視点でフェスタジュニーナで感じた自分なりの今後の課題を3つ、振り返りとして書きたいと思います。

1. 子どもたちの母語を保持する教室に参加していることを忘れてはいけない

今回、参加してくださった法政大学の方や月曜4限の学生など、母語保持教室にばずるのように来慣れていないメンバーとばずるの橋渡し役は、私でした。

何度も反省で出ているように、今回は「フェスタジュニーナ体験」意識が強くなってしまい、子どもたちが安心して勉強できる環境作りに配慮できなかったことが、今回一番の反省だったと思います。

たくさんの方が来ても楽しそうに受け入れている子どもたちの様子を見て、私は安心してしまいました。本来ここは勉強の場であること、いくら楽しいイベントが待っていたとしても、ばずるメンバーがけじめをきちんとつけることを忘れないようにします。

2. もっと子どもや太田の人たちの声を聞きたい

今回カメラを持ち、教室の様子や学生、子ども達、フェスタジュニーナ会場にいた日系ブラジル人の方々、群馬警察の方など、多くの方とお話しすることが出来ました。

今まで私は何度も太田へ行っているにもかかわらず、1日インタビューただけで今まで知らなかった多くの学びがありました。フェスタジュニーナの仕組みがどうなっているか、参加者の人たちはどのような思いでフェスタジュニーナに参加しているのか、また、子どもたちにとってブラジルとは何なのかなど…普段の会話を少し注意深く聞こうとするだけで多くの気づきがありました。

これまでただ見ていただけの太田に、もっと切り込みたいという思いが生まれました。そしてこれを発信していきたいとも感じました。これからは、まだまだ聞けていない太田の人たちの「本音」に耳を傾ける活動をしていきたいです。

3. ばずる活動をもっと有意義にしたい

ドキュメンタリー制作のためのビデオ撮影は今月で一段落しますが、これからも2で感じたような太田の人たちの声をどんどん聞き、そのニーズに答えていけるような更に有意義な活動がしていきたいです。

例えば絵本の読み聞かせは私の力が一番発揮できる活動ですが、読み聞かせで終わるのではなく、何か子どもたちに問いかけ、感じたことを話してもらったりと、コミュニケーションを増やしてお互いに得るものがある活動がしていきたいです。

また、フェスタジュニーナだけでなく海の日企画のように多くの人を巻き込んだ活動や、VERA祭でも、もう一工夫、一つずつの活動を妥協せず考え抜いたものとしていきたいと感じました。

りか

フェスタジュニーナ ふりかえり

里華

フェスタジュニーナ、本当に楽しかったです。

フェスタジュニーナは日本のお祭りとは雰囲気がとても違いましたが、徐々にお祭りの非日常の独特の空気感に飲まれて、どんどん心が高まっていきました。特に、最後のダンスでは組んでくれた方と言葉は通じないけど、踊りを通じて一緒に笑顔になれたことが、とても嬉しかったです。子ども達と踊ったソーラン節とダンスでは、子ども達の踊っている後ろ姿を見ながら、その可愛い姿に、自然と笑顔になって、恥ずかしさも忘れて、楽しく踊ることができました。子ども達とはまだ付き合いは浅いですが、可愛くて仕方ないです。

そして今回、Hiromiさん宅にホームステイさせていただきました。私はホームステイというものはじめて体験するというので、少し身構えていました。しかし、今振り返ってみると、我が家とまではいかないですが、とても温かい家庭に触れて、くつろがせていただきました。本当にありがとうございました。

一日を通して、強く感じたことはみなさんの寛容さです。日本人と比べることではないですが、自然に受け入れてもらっていること、私は当たり前のことではないと思います。また、フェスタジュニーナやホームステイなどを通して、このようなブラジル人コミュニティをもっと知り、交流したいと思いました。また、ただ楽しむだけでなく、自分にできること、何のために行くのか、考えていきたいと思いました。そのためには、コミュニケーションをはかれるように、ポルトガル語が話せるようになって自分から話しかけたいです。

話は飛びますが、私は、今日このあとお祭りがあるからみんな元気なのかなと、教室での子どもたちのいつもと違う様子に気づけませんでした。まだ今回を含めて3回目で、自分はお祭り気分ではしゃいでいて子どもたちのことに気付かなかったのは、まだまだだなと思いました。Hiromiさんやみなさんのお話を聞いて、教室が一番メインで教室ありきだから、教室がまず第一ということを忘れないようにしていきたいと思います。

早希

フェスタジュニーナのダンスを言語の新生舎でやって、なんて楽しそうなお祭りなんだ！と、とても楽しみにしていました。当日は予想以上に楽しいお祭りでした！明るく、出店の人もお客さんも親しんでいる感じ、日本のお祭りでは味わえない雰囲気を感じました。フェイスペインティングではたくさん子どもたちがいろんな絵を頼んできてくれて面白かったです。そして自分の絵の下手さにびっくりしました。（ライオンを描いてって言ってくれた男の子がいて、一生懸命描いたのですが、びみょーな顔をされました。はい、確かにたわしにしか見えなかったと私も思います…来年までに練習してライオン描けるようになります！）フェスタジュニーナのダンス（みんなが輪になって踊るやつです）では後ろのおばさん、おじさんに助けられました。

そうやって助けてくれる優しさは日本人ではあまり見られないなーと感じつつ、なんとか踊りきりました。もっと練習していけばよかったーと反省点として思う気持ちもありますが、おじさん、おばさんと少しだけ触れ合う機会ができて嬉しかった！と思いました。

フェスタジュニーナでは本当に様々な年齢の人と関わることができ、嬉しかったです。普段は子供たちと一緒に過ごす機会が多いですが、おばあさんや高校生と話したり、助けてもらったりといつもと違う経験をし、違う得られるものがあつたと思いました。これからこのようなチャンスにであつたら、自分から積極的に関わっていきたいと思います。

トム

2012年6月30日 フェスタ・ジュニーナの振り返り

フェスタ・ジュニーナに参加したのは初めてだったので、単純な感想として、とても楽しかったというのが一番だったと思います。お祭り全体から、とても元気なエネルギーと、hospitalityというか、うまく言えないのですが、気安い相手同士の優しくて親密な、気持ちの良い雰囲気を感じられて、居心地の良い空間だったように思います。ダンスのときはその両方がとても強く感じられて、参加することができてよかったと思いました。

警察が来ていたことは、私も最初とても驚きました。ただ少なくとも表面的には優しくて、私自身、とても親切にしてもらいました。そうした態度からは、地域の防犯のために外国人住民ともうまくやっっていこうという姿勢があるようにみえました。お互いに友好的な関係を保っていくことが必要だ、という意識があるのは、外国人住民を地域の構成員と考えているからだと思います。それは外国人をあからさまに敵視しているよりはよっぽど良い事だと思えました。

そうした点も含めて、フェスタ・ジュニーナに参加してみて、改めて地域とのつながりについて意識させられました。今まで母語保持教室の中だけに居て、気になりつつも気が回らないでいたのですが、今回初めて「太田市」という地域の中でのブラジル人住民の存在がどのようなものなのか、考えるきっかけになりました。ただ考えるだけではわからないので、今後もっと勉強したり、実際に地域に出て人と話したりしていくことができたらいいと思いました。日本人の参加者がいなかったことは私も不思議に思いました。あの空間自体は閉じてはいないと思ったけど、逆に地域に対して開けた様子というのも見受けられなかったように思います。日本人という圧力が存在しない、ブラジル人だけで楽しめる空間は必要だと思います。気になるのは、やはりあの祭りを周囲がどう受け止めているのかということでしたが、それはあの中にいるだけではやはりわからないことでした。また、そうした環境の中にいたことで、あの中にいる自分の存在が改めて不思議になりました。ダンスのときも、お店にいるときも、ポルトガル語ができなくてもみなさんとても親切にしてくれましたが、日本人がいることで環境を壊しているのではないか、という疑問は教室中もずっと感じていることです。私自身は、ぱずるのメンバーとして活動するようになってから、未だに自分があの場に行くことの積極的な意義を自分自身が納得できる形で言語化できていません。Vamos Papear に対しても、フェスタ・ジュニーナに対しても、自分はお客ではなくメンバーである、という意識はあるものの、それが一体どういう意味があるのか、答えが出ない状態で参加しているのは、自分としては非常に複雑かつ余り良い気持ちではなく、ただそういう自分たちをメンバーとして受け入れてくれるブラジル人の人たちの、寛容さというか、懐の深さのようなものを、より強く感じました。